

「浅茅が宿」の舞台

大阪芸術大学 文芸学科 教授 出口逸平

上田秋成の『雨月物語』（1776年初版）は、怪奇小説の古典として、後世の小説や戯曲に大きな影響を及ぼしている。なかでも打ち続く戦乱を背景に、夫婦の情愛を描いた「浅茅が宿」は、これまで二十本ほど舞台化されてきた。

今回は戦前・戦後の「浅茅が宿」の舞台を代表する岡本綺堂と川口松太郎の戯曲を取り上げ、とくに勝四郎と宮木の人物像を探ってみたい。

1 岡本綺堂の戯曲「増補 雨月物語」（二幕）

1913（大正二）年に書かれ、1916年10月に帝国劇場で初演された本作（『綺堂戯曲集』第四巻所収）は、のちに「浅茅が宿」と改題される通り、下巻はもっぱら原作の「浅茅が宿」に材を取り、そこに綺堂オリジナルの上巻を付け足した二幕構成となっている。

その上巻では、戦乱の京大坂を逃れた勝四郎は、大内氏の城下長門国赤間ヶ関に辿り着き、そこで一度は享楽の巷に酔いしれる。ところが陶晴賢の謀反と悲惨な殺戮に遭遇して、にわかに帰郷を思い立つことになる。原作では、故郷の戦乱の噂を聞いて取る物もとりあえず、妻の元へ戻ろうとする実直な田舎者として勝四郎は描かれる。ところが本作の勝四郎は、廓の遊女になじむ、世慣れた「気軽さうな男」であり、身近に迫った死の恐怖から、ようやく妻を思い出したとする。原作が地味な展開ゆえ、そこに遊女との交遊や戦闘場面を加えて、舞台上に変化をつけたいとの劇作家の苦心はわかるが、その分勝四郎が不実・軽薄な男に見えることも確かである。

じっさい下巻では、勝四郎自ら「女房、堪忍してくれ。故郷のこともお前のことも、実は今まで忘れていたのだ」と懺悔している。この率直な告白は、「揉ざるに直き志」「物にかかはらぬ性」という勝四郎の性格に通じる面はあるが、原作には存在しない。すなわち原作以上に、男の身勝手な台詞といわざるをえない。それに対し妻宮木は、「悲しいわかれも人の世の、逃れぬ定めと諦めて、泣いて送つた女房を、おまへは忘れてみなされたか」と泣いて訴えるものの、「たとひ一旦は忘れられても、かうして帰つて来てくだされば、今まで生きてみた甲斐もある」とすぐに事情を察して夫を許している。原作では『万葉集』の手児女伝説とともに語られる宮木の「烈婦」の一面、すなわち「矢武」な女性の「長き恨み」は、本作では消し飛んでしまう。

こうして本作は歓楽と戦乱の時代相を舞台上に展開させたが、肝心の人物造型では原作のもつ陰影を見失い、平板な恋愛悲劇の型に収まってしまったといわざるをえない。

2 川口松太郎の戯曲「雨月物語」（三幕八場）

川口は1953（昭和二十八）年5月公開の映画「雨月物語」（溝口健二監督 依田義賢脚本）に先立ち、原案となる小説を『オール読物』（同年1月号）に載せた。それを改めて戯曲に仕立て直し、1955年11月に新派が明治座で上演したものが本作である。

その第一の特徴は、映画と同じく藤兵衛・阿浜という妹夫婦を登場させたことであり、第二は「浅茅が宿」の筋立てに「蛇性の姪」を組み込んだ点にある。すなわち宮木の許を離れた源十郎（原作の勝四郎）は、高貴な姫君若狭（「蛇性の姪」では真名児）に出会い、身も心も奪われてしまう。しかも若狭は、綺堂作品の遊女とは全く違う、美のミューズとして登場する。

若狭様は、私の心の底にひそむあこがれの面影にそっくりです。私には妻がいます。夫婦仲も睦まじく、子供も一人あって、何一つ不足はない癖に、それでいて何時も何かの影を追いかけているのです。心の求める人の影が絶え間なくつきまどって、消えたことがあります（早稲田大学演劇博物館所蔵 上演台本）

そして「若狭に会ってからの私は、新しい魂の芽生えを感じず」と語る源十郎は、「蛇性の姪」とは逆に、消えゆく若狭の死霊を追い続けて、ついに気を失う。悄然と故郷に戻った彼は、再会した宮木に若狭の面影を見る一。

初代水谷八重子の一人二役でこそ成り立つ舞台だが、若狭も宮木も源十郎をまったく恨まず、ただ優しく消えゆくばかりである。それに反し「どれほど貞節な女房を持っていても、目の前の美しさに心を惹かれるのが男だ。老い朽ちてはならぬぞ。お前は立派な女房だ。非の打ちどころもない女房だが、それだけでは満足しないのも男だよ」の台詞には、源十郎（ひいては劇作家本人）の強烈なエゴイズムを感じないわけにはいかない。源十郎に一人の芸術家を見出した川口の着想は面白いが、原作の宮木や真名児が持っていた両義的価値（女性の貞節と怨恨、また魅惑と恐怖）を簡単に捨て去った点も同時に指摘しておきたい。

ここまで「浅茅が宿」を原作とする2つの戯曲を見てきたが、いずれも勝四郎の「身勝手な」行動を肯定し、宮木を「従順な」妻として描くという共通した姿勢がうかがえる。

このような男性中心の視点でなく、もっぱら女性の孤立と悲しみを描いた画期的な作品が石澤富子の「浅茅が宿」（文学座 1978年初演）であり、男女間の深い断絶をドライな視点から斬り込んだのが別役実の「当世風 雨月物語」（円 2001年初演）であった。こうした現代演劇としての「浅茅が宿」受容については、稿をあらためて考えたい。